

和洋 愛のかたち ～なみだの浪曲vsオペラの情熱～



「オペラのムードに違和感なく入り込めた。清原さんに頼ってやりました」と京山小圓嬢さんが褒めれば、「浪曲の感情や情景が目には浮かび、芝居がしやすかった。共演できて光栄」と清原邦仁さん。昨年10月29日、クラブ関西(大阪市北区)で開催されたアート・アセンブリー2013「なみだの浪曲vsオペラの情熱」で、二人はそう語ってお互いを讃えた。

(ひと)よ」で歌い上げ、続いて小圓嬢さんが「世間の人様から、お里は器量良しじゃ、べっぴんじゃと、誉めていただける其方が不憫。狼谷へ身を投げて私ゃあの世へ参ります」と、沢市の身投げシーンへと畳み掛ける。それを合図に力のこもったピアノが入り、清原さん歌うは「さらば愛の家(オペラ・蝶々夫人)」。蝶々夫人を残して帰国するピンカーソンの歌だが、清原さんが朗々と歌えば歌うほど、自己犠牲とはいえ男の身勝手が強調整され、憎々しく感じてしまうほど。物語の世界に引き込む演出の妙である。

演目は文楽や講談でも有名な『壱阪靈験記』。そのクライマックス、盲目の夫・沢市が、壱阪寺観音様の靈験で光を得ようと恋女房・お里を伴って急な山道を行くうち、自分がいては生涯お里に苦勞をかけると考え、腹痛と偽ってお里を家に返し自分は谷に身を投げる。そうとは知らず薬を取って戻ったお里。「目の見えないのに一人で死んで、弥陀の浄土に行く道は、誰を頼りに行かしゃんす」と、沢市の後を追って自らも谷に身を投げるが…。

上演を主催した関西・大阪21世紀協会の堀井良殷理事長は、「普段の公演では見ることでできない実験的な試みも楽しんでもらいたい」と言う。浪曲とオペラの共演は、イタリア語が分からない身には、心象世界(アリア)から現実世界(浪曲)へと感覚がスリップする不思議な体験。万雷の拍手のなかで、愛は純粹で美しいがゆえに、哀しい一面もあることを悟らされた気がした。

(ライター 三上祥弘)

京山小圓嬢さん 清原邦仁さん

(オペラ歌手)

(浪曲師)

アート・アセンブリー2013

2013年大阪文化祭賞受賞

2013年大阪文化祭奨励賞受賞

愛する人の幸せのためには自己犠牲も厭わないという浪曲(日本人)の哀しさと、愛する人に思いの丈を伝えようと腐心するオペラ(イタリア人)の情熱。和洋で異なる愛のかたちをどう昇華させるのか。ピアノ(佐藤節子さん)の静かな調べに促され、沢市演じる清原さんの、「私を泣かせてください(オペラ「リナルド」ヘンデル作曲)」で幕が開く。

高ぶる感情を抑えつけるような理知的な歌いぶり。目を閉じ、偽りの腹痛で悶絶する清原さんの仕草に、沢市の哀しい決意が伝わる。それが終わると小圓嬢さんの出番。夫のために薬を取りに戻るお里の不安を語り、三味線(沢村さくらさん)の乾いた音色が緊張感を掻き立てる。清原さんは、そんなお里の健気さを「CARO MIO BEN～いとしい女



京山小圓嬢さん

京山小太夫に師事し、1948年に初舞台。以来66年、関西浪曲界の牽引役として精力的に活躍。大ベテランらしいメリハリの利いた啖呵(セリフ)と絶妙なリズム感のある節(曲)で深い情念を表現する。1999年大阪府知事表彰、2013年一心寺門前浪曲寄席「壱阪靈験記」で大坂文化祭賞受賞。2013年度文化庁芸術祭大賞受賞。



清原邦仁さん

1974年生まれ。大阪音楽大学音楽学部声楽科卒業、同専攻科修了。同大学院オペラ研究室修了。日本各地のオペラ公演にソリストとして出演し、幅広い役柄を好演。2005年大阪舞台芸術新人賞、2013年関西歌劇団第95回定期公演「仮面舞踏会(リッカルド役)」で大坂文化祭奨励賞受賞。

アート・アセンブリー：関西・大阪を拠点に活動する優れたアーティストを各界のリーダーに紹介し、アーティスト支援の輪を広げることを目的としたサロン風上演会。2010年から一般社団法人クラブ関西の協力を得て、現在の形で毎年秋に実施している。